

第1回学校運営協議会 議事録

実施日：令和7年5月22日（木）

時 間：15：30～16：50

場 所：六郷高等学校 会議室他

1 全体会Ⅰ 15：30～16：00（30分）

(1) 開会

(2) 出席者紹介・委員委嘱

（敬称略）

佐藤 良一	六郷高校同窓会会長（地域代表）
栗林 守	美郷町教育委員会教育長 ※欠席
小西正一郎	教育振興会会長（外郭団体代表）
大阪 瑞穂	美郷中学校校長（地元中学校代表）
檜森 吉裕	美郷町商工会会長（地域代表）
小松 勉	地元町内会代表（地域代表）
鈴木 正洋	美郷町町議会議員（地元メディア代表）
長谷川幸子	美郷町議会議員・議会広報常任委員会委員長
藤岡 誠人	町活性化団体（地元NPO団体代表）
熊谷 尚輝	前PTA会長
高橋 郷	福祉施設経営者
梶原恵美子	美郷町地域おこし協力隊
進藤 慎	PTA会長 ※欠席
山城 寛幸	校長

(3) 前会長挨拶（佐藤委員）

昨年度もたくさんの議題に関して皆様から意見をいただいた。なかなか前に進めないものもあるが、今年度は前に進められるようにしたい。今年度も奇譚のない意見をいただきながら学校運営協力できればと思っている。

(4) 会長、副会長の選出

（鎌田）

事務局案として、昨年同様会長を佐藤良一 委員、副会長を栗林守 委員にお願いしたい。

『事務局案を承認』

(5) 学校運営方針の説明、承認 （資料を基に、校長が説明）

（校長）

今年度41名の新入生と7名の職員が加わり、全校生徒115名、職員35名で令

和7年度がスタートした。

本校の近年の課題である入学者数の減少については、学年間、職員間で組織力を高めてこの課題に一つ一つ丁寧に組み組んで質の高い教育を提供し、入学者数の増加につなげたい。

六郷高校の中期ビジョンは今年度までのものとなっている。今年12月に、県教育委員会から第八次高等学校総合整備計画が出される予定であり、その計画を元にビジョンを改編していかなければいけない時期になる。時代の変化に対応するビジョンについて第3回の学校運営協議会で話し合うことができると考えている。

学校の課題と取組についてであるが、前校長の意思を引き継ぎ、PTAの協力を得て行う一斉マナーアップ運動等を通じ、基本的な生活習慣の確立を目指したい。

教育振興会の協力を得て、昨年度からeラーニングを取り入れている。「スタディサプリ」というアプリを利用しているが、職員の評判もよく、自分のレベルに合わせた学習ができるという理由で生徒からの評判もよい。普通教科の学習のみならず、職業紹介の動画も視聴できるためキャリア教育にも対応できるアプリとなっている。

個に応じた指導と体験的な学びの充実については、一年生の農業体験や天筆づくりなどを振興会の補助を受け、地域の方々の協力を得ながら取り組んでいる。

生徒支援の充実については、生徒支援委員会が中心となり定期的に生徒に対するアンケートを行っている。「きらり」という業者のアンケートの他に、「ここ×からチェック」（「ここ×から」は「心と体」の意）と呼ばれる学校独自に作成したアンケートで調査を行い、生活習慣の見直しや人間関係のトラブルの発見に努めている。

学校行事の充実については、校内行事はもちろんのこと、地域の祭典や福祉施設の行事への協力をしていきたいと考えている。小学校の体験活動の受け入れは、小学生に本校の福祉科を紹介し、福祉関係の仕事に就く人材を増やす目的で行っている。

「六高プロジェクト」については、この後の分科会の協議題にもなっている。前校長が始めた取り組みで、レタスの水耕栽培や校内のリペア等いくつかある。部活動を頑張りたい生徒や勉強を頑張りたい生徒がいるが、そのどちらでもない生徒の活躍の場を作る目的で行われている。本日の分科会ではこのことについてご意見をいただきたい。

進路指導については記載のとおり。

生徒数減少と生徒募集について。中学生の数が減っていることも要因であるが、最近では中学生が県外の高校へ進学する例も増えており、こういった傾向も要因の一つと考えられる。福祉科を希望する生徒の増加も課題であり、本日の分科会の協議題にもしている。

（佐藤会長）

今の山城校長の運営方針を聞き、意見があればお願いしたい。

（佐藤会長）

マナーアップで先生方が指導しているが、以前は我々のような校外の者も参加していた。是非マナーアップを周知してひろげて欲しい。

（小西委員）

生徒募集について。山城校長が考える特色は何であるか。

(校長)

本校は福祉科や自転車競技部などいろいろな特色があるが、中学生が「六郷高校いいな」と思えるようなアピールをしていかなければならないと考えている。学校の特色が魅力になればよいと考えている。

(大阪委員)

しっかりと課題を捉えながら、対策を考えていることがよくわかった。六郷高校といえば福祉科であるが、福祉課の生徒が減っているのは単に少子化が影響しているのか、それともそれ以外の要因があるのか。

(熊谷委員)

六郷高校の福祉科希望の生徒が少ないという意見があるが、日赤短大は今年度6名しか入学していない。全県規模で6名である。秋田県では祖父母と同居している家庭は多く、子どもが高齢者と関わることには大きな壁はないはずである。介護職は大変であるという認識が、子どもたちよりも保護者に強く持たれているのではないか。高校生に介護職を勧めるのではなく、小中学生段階で福祉の必要性を伝えたほうが効果があるのではないか。

(佐藤会長)

はじめから福祉科を希望して入学する生徒なのか。

(熊谷委員)

そういった生徒は多い。しかし、ガイダンスを通じ、福祉科で学ぶことの大変さを知り諦める生徒も多い。

(小西委員)

福祉科は生徒本人がのみが大変なのではなく、保護者、先生も大変であることを過去に感じた。40人中8人だとすると20%であるが、これは素晴らしい数字だ。それだけ大変な職であるので、いたずらに希望者を募るのではなく、始めから希望している生徒を大切にする学校づくりをしてもらえればと感じる。

(熊谷委員)

福祉科に進まない生徒もいるが、そういった生徒が在学中に福祉を志した場合に、六郷高校から日赤短大に進学するというルートができれば、福祉業界はつながっていくと思う。

(鎌田)

たくさんの意見ありがとうございました。今年度の学校運営方針の承認をお願いします。

『学校運営方針を承認』

(6)年間計画の説明(鎌田)

(資料のとおり)

2 分科会 16:00～16:35 (35分)

第1テーマ「体験的活動（六高プロジェクト）の推進について」於：会議室

第2テーマ「福祉科希望の生徒を増やすためには」 於：図書室

◆第1分科会

テーマ：体験的活動（六高プロジェクト）の推進について

委員：佐藤良一、小西正一郎、大阪瑞穂、鈴木正洋、藤岡誠人、梶原恵美子

ファシリテーター：佐藤教頭 記録：鎌田裕太

(教頭)

本分科会は、「六高プロジェクト」に関する分科会である。実現可能なこと、可能でないことも含めてたくさん意見を出していただきたい。

本校では体験的な活動を「六高プロジェクト」として取り組みを始めて、今年で3年目になる。しいたけ栽培、レタスの水耕栽培、生徒が教える小学生を対象としたプログラミング教室、大曲支援学校での出張プログラミング教室、校内リペア活動など多くの活動を、授業と部活動以外の活動として、主に部活動に所属していない生徒を中心に行い、生徒の活躍の場を作っている。

そろそろ活動のブラッシュアップを図り、ある程度の方向性をもちたい。強化すべきこと、新しく取り組めること、地域が関わることのできるプロジェクトの3つの視点で意見をいただきたい。また、今年度のように管理職が全員異動ということもあり得るため、持続可能な取り組みにできないかと考えている。

(佐藤委員)

しいたけ栽培が始まったころの話ではあるが、しいたけを栽培したこと、施設に寄付したこと、新聞に載ったこと、というしいたけ栽培の一連の活動を通じ、2人の女子生徒の変容を見てとることができた。特にコミュニケーション能力の向上につながったと感じている。

教職員の負担を幾分でも軽減するために、これらの活動に我々学校運営協議会の委員や地域住民が関われるようになればいいのではないかな。

(鈴木委員)

六高プロジェクト以外にも活動が行われている。例えば梶原委員が行っている食との関わりや、小西委員が行っているかまくらがある。六高プロジェクトは継続していけるかは不安に思う。例えばプログラミング教室は前校長が主導して行っており、ある程度の体制も固まりつつあったと思うが、それがきちんと受け継がれるのだろうか。

プロジェクトの強化については、参加生徒の人数にもよるのではないかなと思う。先生方の手を借りずに、地域住民が六郷高校に来て教えてもらえるような活動になるのが理想なのではないかな。

(小西委員)

六高プロジェクトは栽培、IT、交流の3つだと思うが、このように分類をして取り組むほうがスッキリするような気もする。この内の一つに着目し活動を広げることもできる。

(佐藤委員)

前校長はとりあえずやらせてみようと考え始めた。実際、活動ができているのだから、次はその先の目的を作って、その達成のために生徒が活動できれば、生徒の将来にプラスになると感じる。

(藤岡委員)

地域とどうつながることができるかを考えたほうがよい。レタスの栽培を先生が教えるのは難しいので、地域とつながるためには、高齢者から指導を受けるほうがよいのではないか。神岡の中川原の桜の例がある。高齢者が剪定や整備を行っているが、神岡小学校の4年生が授業の一環で、高齢者とともに桜の木に追肥を行っている。子どもたちが成長してからも桜は残るので、子どもたちの心にもずっと残る。六郷でやるならなにができるのか。

(小西委員)

高齢者というのはよいと思う。かまくら行事の際、雪宮づくりのために高齢者と高校生に作業をお願いしたことがあるが、世代は大きく違うが、仲良く楽しそうに作業をする様子が見られた。目的にあった高齢者を自分たちで探すのは難しいので、シルバー人材センターを介するとつながりやすい。ただしそうなれば、資金面の問題が出てしまう。

(梶原委員)

昨年度六郷高校の施設を借りながら「美郷雪華」のエキスをを使ったスイーツの制作を行った。かまくら行事でも、エキスをを使った甘酒の提供ができた。今年も計画があるが、また六郷高校と関わることができないかと考えている。六郷高校が参加することによる町と高校のメリットを考えながら進めたいと考えているので、後ほど相談させていただきたい。

千畑の水芭蕉の群生地を見て感激した。保存会の方々が整備しているようだが、このような元々地域にあるものや、食文化などの伝承に関わっていければよいのではないかな。

(鈴木委員)

水芭蕉は元本堂である。年々群生地が広がっている気がする。

(佐藤委員)

以前は美郷中に六郷高校の学校祭の宣伝にいったこともある。結構な中学生が学校祭に来ていた記憶がある。可能かどうかはわからないが、中学校と高校で部活動の交流ができればお互いにプラスが生まれるのではないかなと思う。

(梶原委員)

去年は美郷中学校と六郷高校の学校祭が同じ日だった。日程が被らないような連携も必要だと思う。

(教頭)

ここまでの意見交換をまとめてみる。六高プロジェクト以外にも色々な取り組みがあるが、分類をしたらどうかという意見、プロジェクトの先に何があるかを示すという意見、高齢者を巻き込むのも一つの方法であるという意見、神岡小学校の例のように、毎年つなげてできる取り組みがあればどうかという意見があった。

他に、新しく取り組んではどうかということはないかな。

(藤岡委員)

どれくらいの生徒が、週にどれくらい活動しているのか。それによってできることも

変わってくる。

(鎌田)

現在はしいたけ栽培を行っている。2年生を中心に10名前後の生徒が活動している。週に何回と決まっているわけではないが、参加可能な生徒がその都度活動している。今後新しい菌床を購入し活動していく。畑も種を購入し、栽培を始める段階である。プログラミング教室は、担当する職員が野球部の顧問ということもあり、夏の開催は難しいため冬の開催を計画している。

1年生にはまだ声がかかっていない状況であるため、1年生への声掛け次第では今後増えていくことも考えられる。

活動頻度は週に2, 3回で、都合のつく生徒が放課後に長くても30分程度活動している。

(佐藤委員)

先生方が担当しているものを地域住民が来校し教えられればいいのではないかな。

(鈴木委員)

リペアの生徒は何人ぐらいいるのか。

(鎌田)

リペア専門の生徒がいるわけではない。活動毎に生徒を募集し活動している。すべての活動に参加する生徒もいる。

(梶原委員)

逆に何にも参加しない生徒もいるのか。

(鎌田)

いる。現2年生に限って言えば、何もやらなかった生徒は少ない。

(藤岡委員)

強制力はあるのか。

(鎌田)

強制力はない。一度何かの活動に参加した生徒が、次の活動のとき友達を連れて来るといった流れもある。

(小西委員)

かまくら行事のときは、現2年生は記念品づくりに全員参加してくれた。

(鈴木委員)

新しいことを始めるのであれば、今隙間や空白になってしまったことがあればそれに着目してみたらいいのではないかな。

六郷高校では司書がいなくなったので、図書関係の活動をして見たらどうか。他にも、AEDがどこにあるかをマップにしてみてもどうか。町の役に立ったことで喜びを感じてもらえればよいのではないかな。

◆第2分科会

テーマ：福祉科希望の生徒を増やすためには

委員：檜森吉裕、小松勉、長谷川幸子、熊谷尚輝、高橋 郷、山城校長

ファシリテーター：佐藤しずか

記録：小松厚子

(ファシリテーター)

本日はよろしくお願いします。お一人ずつ自己紹介をお願いします。(自己紹介)

この分科会では「福祉科の入学者を増やすには」とそのために「情報発信の仕方」についてを協議をお願いします。

●福祉科の入学者を増やすには

(熊谷委員)

日赤短大の先生と話す機会があったが、学生数が減少しているとのことであり、今年度の入学生は6名しかいないようである。対して六郷高校では8名の2年生が福祉科で学ぶことを決め先日宣誓式を行った。これは全県規模の短大では6名で、県南地区では8名の生徒がいるということの意味している。

入学時点では福祉科希望の生徒がもう少し多かったはずであるが、そのカリキュラムの特性に不安をもち、福祉科に進むことをやめた生徒もいるはずである。そういった生徒であっても、2,3年生になってから福祉を学びたいか考える者もいるかもしれない。そのような生徒向けに、日赤短大と連携していける体制を作るとよいのではないか。連携を強めることで、秋田県を出なくても福祉の資格取得ができることの周知にもつながる。日赤短大へ進学後に利用できる、就学支援金などの制度が整っているとよい。このような体制ができれば、一度福祉科に進もうとして断念した生徒への道になるのではないか。

(ファシリテーター)

福祉系に進学しやすくなると思われる。貴重なご意見をありがとうございます。

(高橋委員)

2年生の8名の生徒の宣誓式を見せていただいた。あれを見て「こういう進路もあるのだ」を知ってもらいたい。

介護業界は資格の有無で給与や待遇に差が出る。介護福祉士の資格を取ることのメリットを示しながら、六郷高校のPRを今まで以上にし、中学生とその保護者に六郷高校に目を向けてもらえるようにするべきである。県内唯一の福祉科という印象が薄れてきているかもしれない。さらなるアピールが必要なのではないか。

実際、2年間で介護福祉士の資格を取るのはかなり厳しいことである。特に、夏休みの実習はスケジュールがタイトなので、それで福祉科の選択を辞める生徒もいるのではないと思われる。進め方次第で福祉科を諦めた生徒を救うことができるのではないか。

(ファシリテーター)

「福祉科希望の生徒を増やすには」というテーマで皆様からご意見をいただきたいので、よろしくお願いします。本校では入学時、普通科と福祉科はくくり募集を行い約半年間で本人の適性を見極めている。福祉科があることが当たり前になっていて、生徒にとっては目が向きにくくなっているかもしれないため、福祉の仕事について情報発信をしていかなければならない。

夏休みの実習や、1年10月からの履修など、厚生労働省規定の単位数に到達するためには現行の進め方でないといけない。

PRの方法やご意見があればお願いしたい。

(檜森委員)

福祉科希望の生徒を増やすに、日赤短大にアプローチするのはよいと思う。

地域の高齢化が進み、福祉関係の仕事には確実に就くことができる。受け入れ人数や生徒の地元定住のために、本校を選んでもらえる材料が必要である。そのためには保護者へのアピールも必要である。介護の仕事は3Kでないことや、将来的に要介護になった場合、身内に福祉関係で働く人がいると心強いという印象を持ってもらえるようなアピールが必要と考える。秋田県にいるから、福祉の仕事があるという考え方をもってもらえればよいのではないかな。

SNSで子供たちに介護の仕事の魅力を発信するのはどうか。

(ファシリテーター)

現在Instagramを発信中である。親御さんを巻き込んで将来を考えるというのは重要であると思われる。

(長谷川委員)

自分の母親が介護が必要な年齢になっている。身内が福祉関係の仕事の経験があるので心強く思っている。家族の方が介護の仕事についての理解があることは大事である。

(檜森委員)

SNSはいかに多くの人の目にふれるかが大事である。拡散する努力をしてもらいたい。

●情報発信の方法について

(檜森委員)

介護業界に関して、つらい仕事だというイメージを払拭すべきである。

(高橋委員)

実際はそれほど悪いわけではなく、給与体系など会社で努力している。補助金等の制度もある。我々介護業界からのPRや、努力も必要である。

地元の美郷町や大曲地区の中学校を対象にして、六郷高校の卒業生で、介護現場で働く人の声を届けられればよいかもしれない。そのような企画をしてはどうか。

(校長)

本校に来て初めて福祉科に関わることになった。本校の福祉科の生徒は厚生労働省の厳しい規定のもとで資格を取り働いていると思うが、福祉施設で働く本校の卒業生と、本校以外の卒業生の違いは何であるのか。

(高橋委員)

資格はなくても3年の実務経験があれば、介護福祉士の試験は受けられる。しかし、一から教えなければならない。また、資格の有無で給料にも差が出る。資格があると教える手順が少ないため、すぐに一人前として働くことができるメリットがある。

(檜森委員)

資格がないと手当が異なり、ボーナスに差が出る。資格所有者でないとできない業務もある。

(熊谷委員)

資格があると、仕事に向き合う姿勢に自信があるように思われる。知識に不安があるとうまく学ばなくなる。資格の有無で正社員と契約社員の違いが生じることもある。当然給与やボーナスも異なる。

(高橋委員)

楽しいやりがいのある仕事であること、資格の有無で雇用形態や給与に差が生じるこ

と、これらのことを中学生にアピールすることが必要であり、加えて保護者の理解が必要である。

(檜森委員)

中学生段階で進路をどうするか判断は難しいと考える。この地域では、福祉の仕事は将来的に安定しているというイメージを持ってもらえばよいのではないか。

(高橋委員)

少子化の影響もあるので、急には志願者は増えない。むしろ減って当然の状態である。入学者も増えないかもしれないが、福祉業界が中学3年生の選択肢になればよい。

(檜森委員)

日赤福祉短大との連携を深めて、福祉科を考えつつ普通科に進んで卒業した生徒が福祉科と同じカリキュラム、メニューの学習ができるようにしてはどうか。

福祉の道に進みたいという志はすごいことであるので尊重したい。

(長谷川委員)

福祉の道に進むことができる人、考える人がいることは大事である。福祉科のイメージアップができるようになるとよい。

(ファシリテーター)

貴重なご意見を多数ありがとうございました。

入学者を増やすために、単位のとりにくさについて日赤短大と連携を図り、福祉科をあきらめた生徒にも対応する取り組みを考えたい。

中学生への働きかけが不可欠である。福祉の仕事は大変であるというイメージを取り払い、やりがいのある仕事であるとアピールすることが必要である。

情報発信としては目にとまりやすいSNSを活用していくことを検討したい。

本日はありがとうございました。

3 全体会Ⅱ 16:40～16:50(10分)

(1) 各分科会からの報告

(2) 学校運営協議会会長 挨拶(佐藤委員)

討議ありがとうございました。我々委員は意見をだすだけではなく、いかに実行していくかを考えていかなければならず、学校への助言をしていくことができればと思う。羽後高校の学校運営協議会の委員と話をしたことがあるが、羽後高校では慶應義塾大学の大学院生が委員となっていて、プレゼン能力を高めるために高校生にアドバイスをしている。羽後高校では全国初となる「リサイクル科」をつくり、全国規模での生徒募集を始めようとしている。我々も知恵を出し合って六郷高校のために頑張りたいと思う。